深夜に爆弾の雨

報道規制されていた当時の新聞

馬区山東町 状惨の

死傷者九〇名に達する

▽…昭和二十年一月十六日午後十一時二十三分ごろ、真暗に燈火管制のひかれた京都市上空へB29爆撃機一機が、あの独特の重苦しい爆音をひびかせながら高度約六千㍍で侵入してきた。多くの京都市民は、聞きなれた音とはいえ、暗がりの中で息をころしながら早く上空の敵機が去ることを願っていた。

ちょうど東山上空に差しかかったとき、同機から二百五十㌔級焼夷弾一個と二〇～一〇㌔爆弾約六十五個が投下された。

ものすごい爆発音とともに一瞬にして東山区修道学区の上馬町、下馬町、永田町、常盤町、下村町、西常盤町、東前川町、さらに六原学区の白糸町の住家百四十一戸が全半壊し死者三十四名、重軽傷五十六名の多くの犠牲者が出た。

当時の京都新聞を見ると、被爆から二日後の一月十八日の朝刊二面に（当時は紙不足のため夕刊は発行されていなかった）四段抜きの凸版見出しで〝魔翼遂に京都を侵かす〟「深更不意打の盲爆」として掲載されており、内容は「十六日深更敵機は遂に京都の空を侵し京都市の一部を盲爆するにいたった。被害はごく軽微であり、被災区域の住民も極めて平静で応急措置に活躍、関係当局諸機関も全て一丸となって……」といったきわめて抽象的な表現で、いつどこに爆弾が落ちて何人死んだとかひとことも報じられていない。国民の士気に影響するということか、当時の新聞記事の検閲がいかにきびしかったかがうかがえる。

京女第三小松寮も全壊

また昭和三十四年に発行された京都女子学園五十年史の中で、当時同女子高校教諭の岡本隆雄さんは、戦災を受けなかったという唯一つの大都市の片すみで、私たちの学園は戦火の恐怖を経験したとつぎのように書いておられる。

……床の中でうつらうつらしながら米機の爆音を聞いていた。すると急に耳もとで途方もない大きな爆発音が響いたなと感じたとたんに目がさめ反射的に起き上りました。（中略）急いで着替えをしようとするとガラス障子が二枚、桟がばらになって夜具の上にのっていました。急いで学校へかけつけました。（中略）「第三小松寮がやられて、寮生が下敷きになっている」と告げられたので現場へかけつけました。そこではもう警防団員や寮生が見えない寮友の救い出しに必死の働らきをしてくれていました。（中略）だれかが「この下で声がきこえる」と叫びました。期せずしてみんなはそこに集まり無事であることを念じつつ、折り重なった邪魔物を取りのけていきました。「いた、いた」だれかの声のした方を見ると、頭からすっかり壁土を浴びた一寮生が背中をまるくし、はいつくばうようなかっこうで現われました。寮友は泣きながら夢中でかけ寄り、抱きかかえるようにして静かに立たせました。（中略）馬町方面の被災の程度、被災者数などは発表されなかったのでわかりませんが見渡す限り、家という家は全壊でした。使った爆弾は、当時モロトフのパン屑といわれた小型のものであった。……と記されている。

義援金六千余円集る

また、同地域を管轄する松原警察署の記録をみると「……ただちにこの旨警察部に速報、署員ならびに管内各警防団員の非常招集を命ずるとともに署員十七名を引卒現場に出張東山臨時駐在所を臨時署本部と定め交通遮断をする。五条、七条、川端、堀川、西陣、中立売等各署員の来援あり、救護、救出、人身安定のため巡ら慰問、災害調査を依頼した。

また人身安定のため報道班の掲出せるビラ次のごとし「デマをとばすな」「デマにまような」「流言は敵の謀略だ」「口をつつしみすぐ敢闘だ」「被爆地の写真撮影を禁ず」「この敵を増産で撃て」

また被災者中、重軽傷者は修道国民学校応急救護所に収容、軽傷者は治療し、重傷者は日赤、八坂、帝大、府立医大各病院へ送り治療を行なった。死者、負傷者の発掘は十七日午後三時終了、死体は修道国民学校応急救護所に収容したのち東山七条智積院に移転、一月十八日合同慰霊祭を行なったうえ火葬場に送致した。

災害地のあと片付けは十七日当署員六十名、警防団員五百名、在郷軍人三百名、特別警備隊四十名。十八日は当署員五十名、警防団員二百五十名、特別警備隊四十五名、緊急工作隊三百二十名。十九日は当署員四十名、特別警備隊四十五名、緊急工作隊六十名をもってそれぞれ行なった。